令和5年10月15日発行　刀剣界　第67号

繁慶の六十余州鉄砲奉納は石見銀の安全輸送祈願でないか

伊藤　三平

繁慶（鉄砲鍛冶銘：清堯）は鉄砲鍛冶でも名工であった。徳川家康が駿府に隠居する時、信頼している鉄砲鍛冶、瓶惣八郎に同行を求めたが、老齢を理由に自身の代わりに推挙したのが清堯である。家康の形見分け記録である駿府御分物帳に家康や家康子息用の清堯の鉄砲が現存している。そして、家康に命じられて諸国の一の宮に鉄砲を奉納したことも知られている。この奉納は大坂の陣の戦勝祈願とする説が有力だが、これは石見銀山からの産出銀の海路輸送に際しての安全祈願を託されたものではないかとの説を提示したい。

一、六十余州への鉄砲奉納の経緯

清堯の鉄砲奉納の経緯は日御碕神社に残されている「元和四年霜月二十六日の野田善四郎（清堯）書状」（図1）から知れる。

「相國様の仰せによって日本六十余州の大社へ鉄砲一挺ずつ進納します。一、日御碕神社　一挺、一、杵築大明神（出雲大社）一挺、隠岐國大宮　一挺、一、竜宮　三挺之内一挺（竜宮分の一挺は）日御碕海中へ納め、残る二挺は阿波鳴門、長門赤間関に沈め置かします。唯今、鉄砲四挺を進上しますが、いずれも御社（日御碕神社）に納め、それぞれの宮へ御納め下さって、大宮司様から御取状を貰ってください。」（読み下しは一相國様と鉄砲の奉納」辻本直男著『大日光60』参考）

図1　清堯（繁慶）の日御碕神社への奉納文書

『日本刀の歴史と鑑賞』（小笠原信夫著）より

「六十余州の大社へ鉄砲一挺進納」とあるが、書状に記載以外では上野国貫前神社、摂津国住吉大社に現存しているが、他では発見されていない。なお文献上で三河国白鳥大明神への奉納が確認できる（表1参照）。

表1　清堯（繁慶）が奉納した鉄砲

	銘文		製作年月日	所蔵
現存（注1）	野田善清堯（花押）	上野国　一宮大明神　奉納　日本六十余州	慶長16年8月吉日	貫前神社
	野田善清堯（花押）	奉納　雲孫杵築御宝前　日本六十余孫大社寄進之内	慶長17年10月吉祥日	出雲大社
	野田善清堯（花押）	奉納　出雲国日御碕登神御宝前　日本六十余孫大社寄進之内	慶長17年10月吉祥日	日御碕神社
	野田善清堯（花押）	奉納　摂津国住吉大明神　日本六十余孫大社寄進之内	慶長18年5月吉祥日	住吉大社
文献上	銘文		製作年月日	出典
	野田善清（花押）※1	奉納　三河国白鳥大明神　日本六十余州御神殿	慶長17年8月吉日	（注2）
	野田善清堯（花押）	奉納　隠岐国大権現　日本六十余孫大社寄進之内	慶長17年10月吉祥日※2	（注3）

（注1）『日本鉄砲の歴史と技術』（宇田川武久編）の「野田清堯の鉄炮銘からみた武家の序列」（安田修著）に所載の「現存する清堯銘の鉄炮一覧」表を元に、「清堯の鉄砲」（辻本直男著）「刀剣美術」1965.4から補足。
（注2）文献上の三河国の鉄砲は『神社を中心とした寶飯郡史』から発見。
（注3）文献上の隠岐国の鉄砲は日御碕神社に残る清堯書状（「清堯の鉄砲」（辻本直男著）「刀剣美術」1965.4）より。
※1　野田善清は野田善清堯の間違いと考えられる。
※2　清堯書状には製作年月日は無く、「相國様と鉄砲の奉納」辻本直男著（『大日光　60』昭和63年2月）より引用

上野国貫前神社は徳川氏が先祖とする新田氏、三河国白鳥大明神は徳川氏発祥の地の一の宮である。なお『姓氏家系大辞典』第三巻（太田亮著）の「野田」氏の項に「三河の野田氏、寶飯郡白鳥大明神慶長十七年八月棟札に「野田善清」（野田善清堯の誤記か）を載せ、碧海郡櫻井村白山社神主に野田氏、社領五十石也などの記載がある。清堯は神官の一族出身であるために、徳川氏の祈願にも関与したのではと考えている。

なお、もう一挺現存する摂津国住吉大社は、古来から海上交通安全を祈願する神様であり、このことは二で詳述したい。

前記書状から辻本直男氏は「相國様と鉄砲の奉納」の論文で次のように論じて、これが通説になっている。

①奉納された鉄砲には慶長十六～十八年（一六一一～一三）の年紀があり、この時期の徳川家の願い事とは対大坂方との勝利以外には考えられない。

②上州貫前神社は、祭神が経津主神という武神であり、徳川家の祖先新田氏の生国であることから選ばれた。

③住吉大社は、大坂城の南方からの攻撃進路に沿っていること、戦場になる摂津国の一の宮としてこの地方の人々の篤い信仰があることから選んだ。

④出雲、隠岐の四社分は慶長十七年には完成していたが、大坂の陣が終わり、元和二年（一六一六）には家康公も逝去され、奉納のタイミングを失したが、元和四年に日御碕神社と連絡が取れ、奉納できた（文書の年号は家康死後であり、相國様については家康、秀忠の両説があるが、辻本氏は他の論文の中で家康と推定されている）。

⑤龍宮の三挺の内、二挺は瀬戸内海の出入り口を扼し、潮の流れの激しい阿波の鳴門と赤間関が選ばれた。日御碕の海は本州の最西端に当たり、日御碕神社の下の宮が日沈宮といわれるように夕陽は美しく、その彼方に竜宮を想定したためであろう。祖先の新田義貞が鎌倉攻めに際して稲村ヶ崎で黄金造りの太刀を沈めたことにあやかろうとしたのではないか。

⑥他の六十余州の大社には今のところ鉄砲も文書も見つかっていないが、とても全部には及ばなかったのではなかろうか。もちろん、他の神社にも奉納されたが、現存はしていないという可能性はある。

なお日御碕神社、住吉大社には刀鍛冶に転じて後の「小野繁慶」銘の奉納刀も現存している（奉納刀は高野山にもある）。

二、託された祈願とは石見銀の安全な海上輸送では？

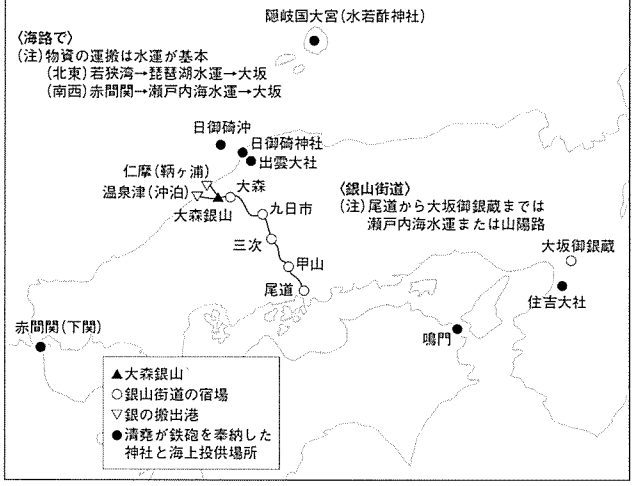
私は日御碕神社の奉納文書から、相國様から託されたのは「海上交通の安全」であり、それを日本海側の神様（海上交通安全にも御利益がある）と特に海上交通の要と考えた日御碕海中と、阿波鳴門、長門赤間関の海の神様に奉納したのではと考えている。

龍宮へ鉄砲を投げ入れて祈願するのは海神祭祀方法の一つの「海神投供」に他ならない。そして海神への願いは「海上交通の安全祈願」「豊漁祈願」「漁労活動の安全祈願」等であり、阿波の鳴門、長門の赤間関という海の難所を考えると「海上交通の安全祈願」が妥当である。

では何故、日本海側の出雲で海上交通の安全祈願をしたのだろうか。これに関して、私は当地の近くから産出される石見銀山の銀を安全に運搬することの祈願ではないかと考えている。

関ヶ原の戦い後、家康は直ちに毛利家から石見銀山を取り上げ、大久保長安を銀山初代奉行とする。長安は測量技術を駆使して「横相」と呼ばれる坑道掘削技術を導入して幅広く銀鉱脈を掘り当て、水抜きも簡単にした。また山師安原伝兵衛を登用し、彼は釜屋間歩という坑道を発見し、慶長八年にここだけで三千六百貫（一三・五トン）の運上銀を産出したという。産出の全盛期は元和期（一六一五～二三）まで続く。

図2　大森銀山に関係する地と、清堯が鉄砲を奉納した神社と海上投供場所



産出された銀は鞆ヶ浦（仁摩町）や沖泊（温泉津町）から積み出されていた。海上交通は危険が伴い、特に冬の日本海は季節風が強く航行に支障が多いため、大久保長安は中国山地を越え瀬戸内海へ至る陸路四日間の「銀山街道」（大森～三次～尾道）を整備し、尾道から大坂、伏見までは瀬戸内海の水運や山陽道で輸送するルートも設けている（図2参照）。

三、勘合貿易から南蛮貿易へ
―銀が輸出品の主役に

戦国時代末期になると明との勘合貿易に代わって南蛮貿易の時代となる。東洋に進出したポルトガル、スペインが、明の東南アジア諸国に対する海禁緩和を活用してマカオ、マニラに拠点を設け、明、東南アジア、日本を結んだ三角貿易を行ったのである。

明は一六世紀半ばから税制を一条鞭法（唐以来の米麦、生糸など生産物の現物納と義務労役の二本立ての税制）に改めたので、銀の需要が高まる。この銀が日本の石見銀山から大量に輸出され、生糸や武器などが輸入されたのである。輸出品としての銀は、徳川幕府の朱印船貿易へ引き継がれている。当時のヨーロッパの地図には石見銀山（佐摩銀山、欧州ではSOMA）が明記され、一六世紀半ばから一七世紀前半には日本産の銀（大半が石見銀）は世界の産銀量の約三分の一を占めたと言われている。

四、繁慶（清堯）と銀山人脈の関係

繁慶と石見銀山人脈の関係にも触れておきたい。

①大久保長安は慶長十八年に死去し、生前の不正を糾弾されて一族は抹殺され、詳しい事績も不明になっているが、繁慶との接点は駿府で生じた可能性が高い。鉄砲には康継と同様に南蛮鉄の使用を明記した作品もある。長安は八王子に所領を与えられていたが、繁慶には一時期八王子にいて、二代将軍から年々炭千俵を賜っていたとの伝承がある。

②石見銀山の飛躍的な増産を成し遂げた安原伝兵衛知種（備中阜島出身）は功によって備中守と因繁の諱を賜ると伝わる。繁慶の「繁」と通字がある。清堯が繁慶に改銘した事情はわかっていないが、関連も考えられる。

③繁慶は鉄砲鍛冶時代は野田姓だが、晩年には「小野繁慶」と名乗っている。小野姓は日御碕神社の宮司の姓である。前述したように繁慶は神官に関係のある家の出身として、日御碕神社と何らかの関係を持って小野姓を名乗ったのではなかろうか。

繁慶には刀鍛冶に転じた理由、不明な師伝と特異な作風など、謎が多い。今回の考察が謎解明の一助になれば幸いである。